
With a . . .

エルフェイム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

With a . . .

【Nコード】

N4318G

【作者名】

エルフェイム

【あらすじ】

ゴールデン・モーメントの続編。タクミは知人の家を転々としていたが、とうとう最後の場所を追い出された。マネージャーである惺がそんな様子のタクミを見かねて家へ招待する事に。

Come Home! 1 (前書き)

まだBL臭はないですが、今後そういう文章が増えていきますので、苦手な方はご注意ください。

Come Home! 1

スタジオにとたたきと大きな音をさせながら駆けてくる人物がいた。その形相は必死で、誰もが道をあけてしまつほどのものだった。

「ひいゝゝろゝゝきいいいいい！」

「あん？」

いかにも面倒が自分に降りかからんとしている、といった雰囲気
で振り返る。顔には面倒だと書かれていた。

「ヒロキ、頼むっ！」

俺を泊めてくれ！！」

「は？ヤダ」

ヒロキから面倒だから、向こう行けと言わんばかりのオーラまで
出始める。そろそろヒロキの機嫌が悪くなる。だが、現在必死で自
分の寝場所を確保しようと奮闘しているタクミには伝わっていないな
った。

「オネーさんに、出ていけって……」

言われちゃったんだよおおおおお！」

「ジゴージトクじゃん」

「くだらん」

にこにこ後ろから茶々を入れてきたのはユカリだ。今日はピン
クに染めた髪をポニーテールにしている。珍しく今日は前髪を下ろ
しており、緩やかなウェーブを描いていた。

もちろん言い捨てたのはヒロキである。既に、面倒だから相手に
したくない度がマックスに到達している。

「ひでえええええええ」

始終絶叫しているタクミだが、コレには事情があった。しかしそ
んな事情なんかどうでも良い彼らからしてみれば、煩くて邪魔なだ
けだった。とうとう我慢しきれなくなった。とはいえ、我慢が保
つた方なのだが ヒロキがタクミを蹴り上げようとした。

「何やってんだ？」

お前ら」

彼の声を聞いたタクミが標的を変えた。だが、泣きつくだけで寝場所を確保させてくれといった気持ちは全くないようだった。

「慍みいんさああああん！」

「おう、どうした？」

目尻に涙を浮かべる勢いで、慍にしがみつく。苦笑しながらタクミの頭を撫でてやる。

「俺、実家に住んでなくて男友達とか、女の子の家に泊まらせてもらってるって知ってた？」

「いや……そこまでは把握してないが」

突拍子もない話題に、早速ついていけないかもと慍は遠くを見つめた。

「それで、先週くらいからオネーさんの家に泊まってただけけど」

「うん」

「オネーさんがね、『あんた、本当はつまらない男だったのね。期待して損したわ。もうここには来ないでちょうだい』って……！」

「はあ」

マネージャーである慍はメンバーの事情などもサポートする役割であるが、早速関わったことを後悔しそうな顔をしている。視線が遠い。

「そんなコトになって泊まるところがないから、ヒロキの家に泊まるうかと思っただんだ」

「俺はそんなのゴメンだ」

「って、言うんだ」

大まかな経緯を話すと、タクミは少し気分が落ち着いたのでのかしがつくのを止めた。おや？と思う気持ちを抑えた慍が彼を覗き込む。彼は下を向いたままで表情は見えなかったが、悲しそうな表情だけはしていないことが雰囲気から分かる。

「慍さん、ゴメンな」

練習時間になってる」

「あ、ああ」

すっと惶から離れたタクミは、背伸びをしながら遠ざかっていった。少し遠ざかると、タクミが振り返った。

「惶さん」

「ん？」

「黙って聞いてくれてありがとな！」

さわやかな表情で礼を言うタクミに、片手をあげて惶は答えた。

「おい」

練習が終わって一段落したタクミに惶が声を掛けた。タクミは持っていたペットボトルを近くのボードに置く。他のメンバーは我先にと逃げるように帰ってしまった。

「どーしたの？」

「泊まる所なくて、困っているんだろ？」

「うん」

「俺の家に来るか？」

「え……」

一瞬固まったその表情に、断られる予感を惶は感じた。しかしタクミの口から出た言葉は全く逆のものだった。

「マジ、良いの!？」

今にも飛びつきそうな勢いに圧倒されながらも、こくこくと頷く。タクミはきらきらとした笑みを浮かべている。ライブでやったらファンが喜ぶだろうに、と関係のないことを考えながら苦笑した。

「やったっ！」

急いで準備してくるからここで待ってて！」

そう言うなり、彼は走り去っていった。数分後には、そう多くない荷物を持って現れることになる。

荷物の量を見て、意外そうな顔をする。惺はもう少し、荷物が多いと思っていたのだ。タクミが持ってきたのは大きめの鞆と折りたたみ自転車だった。

「荷物積んでいるからその間に自転車を畳んでおいて」「はい」

惺は愛車に荷物を積み込んだ。大きさの割に重い。後で中身は何なのか聞くことにしようと思いつきながら少年を待つ。すぐに少年はやってきた。

「惺さんお待ちせつ！」

小さくなった自転車をトランクへ乗せる。きよろきよろと車内を見ているタクミに、車へ乗るよう声を掛けて自分も運転席へと乗り込んだ。

「惺さん、家どこなの？」

「ん？結構近く」

惺の返事は曖昧で、タクミにはよく分からなかった。どことなく不満そうなタクミをよそに、惺は車を動かした。

「ここから10分くらいの場所にあるんだ。」

建物だけなら、お前も見えた事あるんじゃないかな」

「ふうん」

惺の家は、一体どんな所なんだろう？ 憧れの人物の家を見られる（しかも使う事を許可された！）という貴重な機会に胸を膨らませる。そんな期待を受けているとは知らずに、当の本人は彼を乗せたまま運転を続けているのだった。

Come Home! 2

車を走らせる事約10分。ウィンカーが左を示し、車はそのまま近くにある駐車場へと向かい始めた。タクミはきよるきよると辺りを見回して言った。

「惺さん、もしかしくなくてもココ?」

変な顔をした彼に、笑いながら惺は答える。

「ああ、そうだが」

どこことなく困惑している様子のタクミを見ながら、器用にバックで駐車する。切り返しせずにつまぐ駐車した惺に対してタクミが感激する。

「前から運転上手だつて分かってたけど、すげー巧いんだな!

俺なんか、何回も切り返ししちゃうんだ」

確かにタクミの運転はあまり上手とは言えなかったなと思いつつ、車から降りるように促した。自転車を降ろすように指示をして惺は自分の荷物と彼の荷物を持ち出した。自転車を抱え込んだまま慌てるタクミを笑い飛ばして先に進んでしまう。

「ほら、ついてこないと俺の家には辿り着けないぞ」

惺に言われるまま自転車を駐輪場に置き、彼の住む場所へと移動する。建物は超高層マンションで、彼の住む階はとても階段では行けそうにない程上にあつた。

「さ、どうぞ」

そう言われてタクミが入れば、大きなリビングが目の前に広がっていた。

「すげー……」

「そうか?」

「すげー、すっげー！」

感激のあまり、スゴイを連発しているタクミに惺は苦笑した。偶に彼はこの青年のテンションについて行けない。そろそろ年なのか、と思いつつ青年の声を聞いていた。

タクミの分の荷物もそういえば持ったままだったな、と思い出した彼はリビングへと進むと適当な所へ荷物を置いた。持たせたままだった事に気付いたタクミはバツが悪そうに謝った。

「気にしてないから良いよ。」

俺はお前のマナージャーだし、雑用くらい構わないさ」

「いや、だって……あ・の・惺・さ・ん、だよ!？」

未だに昔の自分を引き出される事が多い。別に現在進行形じゃないのだから、関係はないのではないかとよく惺は考えるが、ファン心理から言つとそうじゃないらしい。

いつまでも誰かに憧れられるというのは悪い気はしないが、ここまで言われると逆に距離感を感じて少し悲しくなった。

「現在は全然、尊敬されるような事してないから。」

過去の事は過去の事で、今とは関係ないだろう?」

そう、このはしゃぎ回っていて少し煩わしく感じる生物に言い放つと、意外な返事が返ってきた。

「そだね。」

惺さんは惺さんだよな。

……確かに、昔の惺さんとは違う気がするし」

「そうか」

簡単に割り切ってしまう、その思考力に感心した。

「今の惺さんの方が、バンドの時の惺さんより好きだ」

「……そうか」

ファン思考ではない、まっすぐな好意を初めてタクミから受けた彼は少し動揺した。純粹に嬉しいと思つた事に照れを感じたのだ。しかしそんな思いに浸っていられるのは数秒だった。

「なあなあ、マナージャーってそんなに儲かるのか?」

今までの会話とは別次元の話題を出され、一瞬動きが止まる。細かい事を一々気にしたりしないタクミはそれに気が付かない。

「いや？ 全く」

「じゃ、どこからこんな家を持つ金が……」

マネージャーの仕事では無理だと、何となく感じ取っていたタクミはぼかんとしながら聞いてくる。惶はキッチンのコーヒーマーカ―のスイッチを入れた。彼は紅茶よりコーヒ―の方が好きだった。コポコポという音が小さく響き始める。

「ああ……俺、社長やってるから」

「はっ？」

社長！？」

ぼかんとしていた青年は思わぬ発言に大声を出した。耳を塞ぎながら不満げに大声出さなくても聞こえてるよ、と惶が答えた。

「小さいけど、ウェブデザイン系の会社を運営しているんだ」

「実はマネージャーって副業？」

少し引きつった笑顔で聞く彼に、軽く答える。

「うん」

「うっそおおおおお！！」

どたどたと賑やかに詰め寄り、大声で喚く。喚かれた側は堪ったものではない。眉を一瞬ひそめるも、大人げないと思いついた。

「あの日は、たまたま居合わせただけだったんだ。」

でも、面白そうだし……どうせ居ても居なくても変わらないマネージャーなら、やっても良いかなって」

マネージャーが副業という驚きが未だに残っているのか、のっそりとした反応をする。

「何で、黙って……？」

タクミの分のマグカップを用意する。砂糖とミルクを用意する為にゆっくりと移動した。掴みかかる勢いでやってきたタクミではあったが、移動の際に何も引っかかった感触がない。どうやら服を掴

む事はしていなかったようだ。

「言ったら、お前らのテンションに関わるだろ？」

それに副業だとはいえ……バンド自体に関しては真剣にみているから、言う必要もないと思ったんだ」

砂糖とミルクを取り終えた彼はテーブルの上に並べる。並べると言ってもタクミの座るであろう場所にだけしか砂糖もミルクも置いていなかったが。

「うーん……確かに、少しシヨック」

どちらかといえば、軽い口調で話す様子にどんな心境の変化なのだと思わず惶は振り向いた。だが、そんな行動とは裏腹に感情に乏しい声が出る。

「だろうな」

「でも、なんかカツコイイから許してやる」

「は？」

タクミを家に招待すると言ってから、まだ数時間しか経ってはいないが想定外の事が次々とやってくる。想定外の連続に、惶の声が遂にひっくり返った。

「ウェブデザインって響きが、カツコイイ」

「はあ……」

惶には、もはや余裕のある受け答えができていなかった。できあがったコーヒーをカップに注ごうとするので精一杯だった。

「で、ウェブデザインって……どんな仕事？」

注ごうとした手がぶれ、数滴のコーヒーが零れる。それを取り繕うかのように彼は言った。

「……もう、この話は止そうか」

テーブルに零れたコーヒーを拭い取りながら、タクミを椅子へと勧める。彼は不満そうな声を上げておきながらもそれに従った。

「あ、惶さん」

「ん？」

「このコーヒー、うまいね。」

「今度淹れ方教えて〜」

美味しそうに、頬を緩めて言うタクミ。本当にそう思っているらしい。

コーヒーマーカーの質が良いんだ、と抑揚なく答えたが実際の所悪い気分はしない。怪は自分の家に人を招く事はあまりしない人間だったが、こういうのも悪くはないと思いき直すのだった。

Come Home! 3

二人でまったりとコーヒーを飲んでいると、タクミが突然叫びだした。

「ああー！ー！」

「どうした？」

なぜ叫ぶのか事情が掴めない惶おそは眉間にしわを寄せた。

「お……俺の大切な、又伊子を置いてきたっ！」

「……は？」

聞き覚えのない単語に彼は不振な視線を向ける。そんな事にはお構いなしにタクミは叫び続ける。

「オネーさんの家に又伊子を置いて来ちゃった！ー！」

会話が成立しない、と頭を抱えそうになる。そもそも又伊子って何者だ。

「うわーん！」

どうしよー、惶おそさああああん！ー！」

それくらい自分で考えて欲しいものだが、このまま放置しておくわけにはいかない。近所迷惑だ。

「取りに行けばいいだろう。」

「……遠いのか？」

遠いのならば、車を出してやろうかと思案していたがタクミは違うという。

「大丈夫なだけどね。」

でも、もう来るなって言われた手前……行きにくいじゃん」

「そっちか」

「うん」

肩を落としてぼそりと言う姿に、頭を軽く押さえた。

「男らしく、正直に言って返してもらってこい」

深い溜め息と共にはき出された言葉を聞くと、うなだれながらも

しっかりとした返事が返ってくる。

「……うん、頑張ってくる」

出て行くこうとする背中に向けて、惺は声を掛けた。

「うまい夕飯、作って待っていてやる。」

しっかりとやってこいよ！」

タクミが出て行った後、冷蔵庫を覗いた惺は顔をしかめた。食材が整っていない。仕方ない、と彼は買い出しに行く事にした。

人を家でもてなすのは久しぶりだ。どんな料理が喜ばれるだろうか。少しずつ楽しくなってくる自分の心を、これ以上盛り上げられないように買い出しを早々に切り上げた。

惺が丁度夕飯を作り終えた時、タクミが帰って来た。

「ただいま」

自分以外の者が、ただいまと言う。惺は不思議な感覚に包まれた。

「おう、どうだった？」

「一応普通に対応してくれた」

あまり面白くなさそうに答えるタクミに、思わず苦笑する。溜め息を吐いて、どっかりとソファーに座り込んだ様子はとてもじゃないが、女の子に追いかけて回されるような人間に見えない。

「良かったな。」

丁度夕飯もできたところだったし、早く食おうか」

熊のようにソファからのそりと離れる様子が笑いを誘う。それを何とかこらえながらテーブルへ食事を並べ始めた。慣れない手つきで運ぶが、それに気付く気配はなかった。

「惺さん！」

「ん？」

目を輝かせて言う彼の様子に惺は不思議そうに反応した。

「めっちゃ美味そうじゃんっ!？」

「……今日はタクミの好きそうな物を、と思って」

そう柔らかく笑う惺の持っている皿に盛られているのは、良い具合に焼けた鮭だった。惺は以前、タクミに鮭は川で捕るのか海で捕るのかどっちなのか聞かれた事があった。どうでも良い質問ではあったが、鮭に興味があればそんな事聞かないだろう。そうか、鮭が好きなのか、と勝手にその時解釈していたのだった。

「確かに俺、鮭好きだけど。」

「って、わぁポテトサラダもある！」

ジャガイモを使用したメニューの時、タクミはどんなに不味くても何も言わずに黙々と食べていた。他のおかずが不味かったとしても、ジャガイモさえ献立の中に入っていれば文句を言わない。

「ジャガイモ、好きだろう？」

「うんっ！」

でも、何で分かったんだ？」

不思議そうに首をかしげるが、惺は秘密だと言って答える事はしなかった。

Come Home! 4

意外に話が盛り上がってしまった二人は、いつもより時間をかけて夕飯を食べ終えた。男がさっさと食べ終えた皿をシンクへ運んでしまう。

かちやかちやと小さな音を出しながら、ゆい惺は丁寧ではあるが手慣れた手つきで皿を洗っていく。何故か惺の背後でうるうると背後霊よろしくやっていったタクミが、近くにあった布巾を手に取った。

そして、洗い終わって水切り用のカゴに入れられていく皿を拭き始める。惺はやらなくても良い、と一言言ってみたがタクミはその動きを止めようとはしなかった。これくらいは世話になるに当たり、やっておきたいと思ったのだろう。キッチンに男二人が並ぶという奇妙な光景であったが、頭一つ分の身長差があるせいかさほど違和感はなかった。

「タクミ」

「何？」

夕飯の前から気になって仕方がなかった事を聞く。そう、又イ子の事だ。

「お前が大切にしていた又イ子って何だ？」

「ああ、惺さんに又イ子を紹介していなかったんだっけ」

紹介、という単語に一瞬生物だったのかと惺は首を傾げた。ソファの近くに置いてある紙袋から、大切そうにタクミが何かを取り出した。取り出されたそれは、明らかに生き物ではなさそうだった。

「じゃーん、これが又イ子だ!!」

「……は？ミシン??」

振り向きざまにタクミが見せたのは、使い込まれたと一目で分かるミシンだった。どうだ、すごいだろうと言いたげに惺に向けて両手でミシンを突き出す。

突き出された側である惺はどうしてほしいのか全く分からず、笑

顔を凍らせていた。当然ながらそんな様子に脳天気なタクミが気付くわけはなく。

「俺の衣装、作らせると高いんだよ。」

「だから自分で作ってるんだ」

偉いだろう、と自慢げに言う青年はきらきらと輝いて見えた。流石はバンドの花形。そう感じさせるほどのものであったが、個人の家。それもファンではなくマネージャーの家である。でされても全くの無駄である。

「そうか、だから衣装の経費が前のだけ安かったのか」

「そゆこと。衣装代、他のメンバーのとは作らせると桁が違っちゃうからさー」

珍しくタクミが苦笑いをする。惺はそんな彼を見て、一体どれくらい桁が違うのか気になり始めた。

「万じゃ足りないんだってさ。一回衣装作ってもらおうと思って、相談した事が前にあるんだけど。」

数十万かかるって言われた。それだったら自分で作った方がいいーと思わね？」

「……何でそんなに桁が違うんだ」

惺が現役だった頃、衣装にそれだけかかった事は数回しかない。その数回というのも大規模なライブやバンドの宣伝に使うアー写やプロモーション映像用の衣装だけである。一般のごくごく普通のライブではそんなにかかる事はないはずだった。

「だからこそ何故そこまで金がかかるのか理解できなかった。」

「ビジュアル系になっちゃったから、だと思っけど。」

そもそも、和服って高いじゃん？それに加えて和服と洋服が混ざったみたいな服が俺多いし。」

「作るのがややこしいんだ。だから値段高くなるんだと思うよ」

ただそれだけの理由で誰もが衣装を作れたらどんなに楽な事だろうか。作ると言っただけで、そう簡単な事ではない。しかしタクミの衣装は素人であるタクミ自身が作ったとは思えない程、よく作り込

まれていた。

「すごいんだな、お前……」

歌唱力はまだまだの癖に」

関心していながらも、ぼろりとこぼした一言をタクミは軽く流せなかった。無意識だろうが、興奮しているせいか顔が赤くなっている。

「な……っ」

いつか俺の声で惺さんをめちやくちゃにしてやる！」

「めちやくちゃって……何だそりゃ」

惺の頭に 今日に入ってから、もう何度目になるか分からない

疑問が浮かぶ。それらの疑問の大半はタクミ関連だった。疑問と言っよりは一理解できない「何か」なのかもしれないが。

「めちやくちゃは、めちやくちゃだけど？」

「わかった。よくわからんが、又伊子が役に立つヤツだって事はわかった」

既に皿を洗い終え、聞き流しモードに突入した惺は適当に話を切り上げた。パソコンの方へ向かう様子を見たタクミは慌てて皿拭きに戻る。

惺のパソコンを操作する音が静かに響き始めた。二人の間に会話が無くなり、沈黙が広がる。静かな空間が生み出された。

不思議な空間だった。普段は惺一人きりである夜の時間だ。今も彼はいつもと等しくパソコンを操作している。しかしその静かで緩やかな部屋には、静寂を楽しみながら皿を拭く青年の姿があった。

「タクミ」

「なにー？惺さん」

ふと、温かな静寂が破られた。皿拭きが終わり、まったりとソファに転がっていたタクミが間延びした返事をする。

「先に風呂入れ。」

湯がある方が良ければ、今から湯を……」

「ん、今日はシャワーだけでいいや。」

先に入っちゃって、本当に良いの？」

変なところで遠慮する事が身についているらしい。

「構わないよ。」

俺はまだしばらく仕事するから入らないし」

「分かった。じゃ、先に入るな」

「……入るな？何だ、その日本語は」

がさごそと荷物を漁るタクミにその咳きが届くことはなかった。

少しの間、何かを探すような音が続いた。その音が止むと、今度はタクミが慥の方へ近付いていく。

「バスルーム、どこ？」

「……ああ、案内するから少し待ってくれ」

半分の空に返事をした慥はそれから数分パソコンを操作し、ゆつくりと立ち上がったのだった。

「慥さん、お風呂ありがとー」

シャワーだけにすると割には、一時間以上も入っていたらしいタクミの満足そうな声がかかった。振り向いて彼を見てみると心なしかつやつやしている。

「このバスルームって、すげーな。」

色々あって、気が付いたら時間が過ぎちゃったよ」

「お前は……一体何をしたんだ」

「何か、いろんな機能あったから面白くて」

質問に対する答えになっっていない返答をしてソファにこてんと転がってしまう。

「あ、でもちゃんと片付けはしたよ。」

入浴剤入れ過ぎちゃってスゴイ泡風呂になっちゃってさー」

「転んで怪我しなかったなら、それでいいさ……」

細かい事を一々つつこんでいると自分が疲れるだけだと理解し始

めた惺は、話を早々に切り上げたのだった。

C o m e H o m e ! 4 (後書き)

次回、ちょっとだけハプニング。

Come Home! 5

仕事を早々に終えてバスルームへと消えていった惺に、タクミは部屋 主にキッチンであったが の探索を始めた。

「お、一通りの調味料とかは揃ってる。

うわー……これ、俺だったら絶対に買わないぞ。

値段めっちゃ高いじゃん」

上の棚まで探索をし、タクミが探索に満足した所で惺が戻ってきた。

「タクミ」

「うん？」

「……入浴剤、入れ過ぎちゃったとか、そういうレベルじゃないだろう。」

全部入れるバカがいるか？」

「俺ー！」

だって、多い方が面白いかなーって思ったんだ」

「気をつけるよ。身体が資本なんだからな」

タクミが思っていたよりもあまり声を荒げる事もなく、彼は寝室と思わしき方へ向かった。

「タクミ、ついてこい」

「うん」

呼ぶ声に対し、素直に従う。惺の所へ辿り着くと、そこには一つのベッドがあった。

「今日からお前はここで寝ろ」

「へ？」

思ってもいない言葉にタクミは声を裏返らせた。惺はさも当然だというような態度を取っている。

「俺はリビングのソファで寝るから心配いらない」

「それ、俺の台詞じゃない!？」

「何でそうなる」

互いの意志が通じず、けんか腰になりつつあるのに気が付いた惺は、一つ小さく息を吐いた。

「立場を忘れたか？」

俺はお前のマネージャーだ。

サポーターすべき人間をベッドに寝かせず自分が寝られるか？」

「それは……そうかもしれないけど」

「なら、ここで寝ろ」

「えええー!!」

不満そうにするタクミを尻目に部屋から立ち去ろうとする。

「惺さん！」

俺、惺さんがここで寝ないなら俺も寝ないからなっ!!」

「……は？」

惺は彼がやってきてから、もう何度目か数えられないくらい同じ言葉を言っている。その事に気が付いているのか、再び息を吐いた。息を吐いた事が気に障ったらしい。タクミが荒々しくなった。こうなるとやはり手に負えない。

「なら、俺がベッドで寝たらお前は どうするんだ」

「ん？ソファで寝る」

「そりゃ駄目にきまってんだろ」

会話が結局最初に戻ってしまう。二人はそのまま一時間近く揉め続けたのだった。

「分かった」

「!!」

タクミの一言に惺が疲れ切った顔を向ける。心なしかその顔には笑みが浮かんでいるようだ。ようやく理解してくれた、そう思っているのだろう。

「一緒に寝れば良いじゃん。」

この大きさなら俺ら二人でも、寝れない事ないし？」

惺は静かに肩を下げた。これ以上揉めていても仕方がない。それにもう遅い時間だ。今日の所は従うしかなさそうだった。

「……分かった。」

今日の所は、そうしよう」

「おっしや！」

存外に楽しそうなタクミに、惺は苦笑するしかなかった。タクミは早速と言わんばかりに、ベッドへ潜り込む。

「今日にも寝るんだろ？」

早く寝ようぜ」

潜り込んで、腕をぱたぱたと振る姿はまるで子供のようだ。

「分かった、分かった。」

すぐ行くよ」

そう言うなり惺もベッドへと潜り込んだ。潜り込むと先に潜り込んだタクミの体温が移ったのか、ほんのりと暖かい。

「へへっ。」

こういうの、久しぶりだなあ……」

「まあ、久しぶりというか……何というか」

嬉しそうなタクミ、微妙に困ったような表情の惺、そうそう見られる事のない組み合わせだ。タクミと惺は二人揃って天井を見つめる。

「おやすみなさい、惺さん」

「ああ、おやすみ」

短い言葉が交わされ、静けさが部屋を支配した。

「ん……」

やけにぬくぬくとしている。とても暖かい。今まで泊まらせてもらっていた時と違う感覚にタクミは目を覚ました。そしてどこことな

く身体が重い。

「え？」

首を動かしてみると、どうやら惺の腕がタクミの上にあるようだ。重いわけだ。このまま動こうとすると、起こしてしまう。どうしようか。少し身じろぎをした。

「……っ！」

身じろぎに反応したのか、惺の腕が動いた。離れていくのだろう、とほっとするタクミを余所に彼の腕は逆の行動を起こす。タクミを引き寄せて、抱きしめる。

「ん……」

小さな呻き声を出すが、起きる気配はない。惺の動きに思わずタクミは固まる。動かなくなった事に満足したのか、そのままの状態で落ち着いてしまった。

「……ええー」

不満そうな呟きを漏らす。それでも呟きは小さく、惺を起こすまいと配慮された大きさであった。これでは暫く起きれそうもない。いつそのこと、もう一眠りしてしまえ。タクミはゆっくりと瞼を閉じた。

何だか今日は寝心地が良い。惺はうとうとと夢うつつに思った。

ぽかぽかする。それに何だか……こう、丁度良く身体にすっぽりと納まる

「……は？」

すっぽりと納まる何かに顔を擦り寄せようとした瞬間、そんな存在がいる事に驚いた。そんなのは今いない。なら、何なんだ。

恐る恐る寝ぼけた頭でゆっくりと目を開くと、そこには惺に抱きしめられたまますやすやと眠るタクミの姿があった。

C o m e H o m e ! 5 (後書き)

すみません、お待たせしました。

もう少し安定した周期で連載していけるよう頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4318g/>

With a . . .

2010年12月12日14時27分発行